絶対零度の文学 大岡昇平論

中野孝次

集英社

絶対零度の文学

大岡昇平論　中野孝次

集英社

絶対零度の文学 〔大岡昇平論〕
一九七六年四月一日印刷
一九七六年四月一五日発行
著者 中野孝次
発行者 堀内末男
発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋二〜五〜一〇（郵便番号一〇一）
電話 二三〇—六一七一（販売） 二三〇—六三六一（編集）
振替 東京一五六五三
印刷所 大文堂印刷株式会社
定価 九〇〇円
乱丁・落丁本はお取り替え致します。

© 1976 Kōji Nakano, Printed in Japan
0095-772039-3041

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

運命と歴史　5
極地のトポグラフィ　31
死のリアリティにおいて　91
歴史小説の問題　181
『幼年』『少年』の世界　207
幸福な時代　あとがきに代えて　249

絶対零度の文学〔大岡昇平論〕

〔装幀〕秋山法子

運命と歴史

小林秀雄と大岡昇平における歴史意識

1

小林秀雄の歴史観については、桶谷秀昭『批評の運命』が三〇年代の論文を追尾して精細に論じている。一九三三年「故郷を失った文学」から、八年後の「歴史と文学」にいたる小林の歴史感覚の微妙な変貌を、桶谷は歴史の内在化過程と見るわけである。《歴史はいつも否応なく伝統を壊す様に働く》にあるのは、歴史と伝統の対立感である。それが八年後《僕等の望む自由や偶然が、打ち砕かれる処に、そこの処だけに、僕等は歴史の必然を経験するのである》と、《伝統感覚が、生活者の覚悟に移され》てゆく過程に、三〇年代の「非常時」の重い影を桶谷は見る。

小林秀雄の歴史観は、この批評家のすべての生きた観念と同じく、彼がその生々しい直覚から抽出した言説（ディスクール）自体の中に論理的に追求しうるものではない。それを生きたものとして把握する努力がつねに読者の側に課せられるわけで、秘密はいつも周到に隠されているから、難解という評判が生れる。虚心に読めば、難解の評判は当らないことは明白であるが、ともかくこれは、明治近代化以来初めて同時代の青年を魅きつけるに足る本物の批評を書いてきた最初の人物で、これだけ知的抵抗感を与えうる文章は稀なのである。だからいまだにその「歴史」と「伝統」を、日本人の歴史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

意識の深部に関わる問題として検討する要求が起るわけだが、桶谷は結論的にこう記している。

……小林秀雄は、これら歴史の流れに水平の正反対の二つの方向（中野註・唯物史観と歴史主義）にたいして終始醒めていた。しかも、歴史の相対主義に安んじることのできなかったこの独特の理想家が、時間の流れと垂直に交叉する「永遠の現在」という「奇妙な場所」にぬきさしならず立ったとき、彼の抱いた歴史感覚は、日々に自己を新しくするという倫理的な意志の異名にほかならない。

桶谷は人間の現実を、《行為することによって歴史を造る部分》と、《必然の法則の「いまだ知られざる部分」、「歴史の自然」に屈従する知恵によって生きる部分》の両義性を孕んだものと見て、小林に後者の典型的な場合を見るわけである。

自由とは、自己の自由意志の及ぶ限り、つまり精神の働きの範囲以上を出ず、それ以外の外界を必然の法則に従う物質の延長体と見たデカルト以来、限度を越えて自由を求める精神が、自己と世界とだけがきびしく対峙する《永遠の現在》をつねに強烈に意識してきたことは間違いない。徹底した精神が自らを投げこむのはいつも《時ははや無かるべし》という絶対的瞬間である。世界は時を止める。そのとき、無限の物的延長の世界が本来のその重圧のすべてをもって個を襲い、個はそれをほとんどわが運命そのものとして容認する。そしてこのような精神にとっては、あるのは《過去から未来に向つて飴の様に延びた時間》ではなくて、すべての瞬間が現実と自己ののっぴきならぬ永遠の瞬間であるような、自己の内的緊張の持続としての時間と映じる。ネヴァ河に、あるいは

流刑地の《荒涼とした河》に見入るラスコーリニコフは、《時そのものまでが歩みを止め》たと感じ、それを名状する言葉を持たない。そして結氷した黒龍江に見入っている小林秀雄は、《未来も過去も観念の塊りに過ぎぬ》と呟くのである。時計の針は壊れる。決定的な破局に直面した人間にとって、時計の針はつねに壊れたと感じられるのであろう。そのとき針とともに、善悪も幸不幸も、諸観念も歴史も、あらゆる社会とその契約的要素もすべて壊れ、ひとは剝き出しの頼りない自己の裸身を宇宙的荒涼の空間にひとり曝しているのではないだろうか。一個の、自分だけの、一回限りの生死の問題をかかえたそれぞれの個にとって、究極の最終的破局は必ずそう経験されるはずである。「運命」として経験されるはずである。

だがそのときでも、自己を抜きにして、外界は存在しつづけ、歴史はその必然的な歩みを止めない。結局、破局なんて存在しないも同然だった。そして、必然的な動かすべからざる「運命」として襲いかかったものも、実はこれも歴史的所産にほかならなかったと教えるのが、近代の歴史観である。破局の運命的経験をした者にとってはばかみたいな話だが、歴史の奇怪な相貌とはそういうものだ。この深い裂け目は埋められない。そして、時間はまた《飴の様に》歩みをつづけ、《世の約束事》はあたかも自然のように固定されてわれわれをくるみこみ、ひとはまた痴呆的にそのふたたび動きだした時間の中を、なんらかの役割を負って歩いていかなければならない。

2

小林秀雄の歴史観、というより、この《直接な純粋な感覚》に頼って生きる強烈な生活者の場合

にはそれは人生観といっても同じことだが、それが最深部の基調音のように見事に表現されているのは、彼が歴史について書いた論文より、例えば「『白痴』について」のような、巨大な存在に震撼された自己の内奥の戦慄をひたと語りつづけた文章かもしれない。毒々しいものや苛立たしげなものは一切消えて、ここではひたすら、中原中也の小林評にいう《純粋に自己自身の即ち魂の興味》のことだけが声低に語られているからである。彼がここで見入っているのは、《時ははや無かるべし》のさらに先へ、限度を越えて生きてしまった人物たちの目に映じた奇怪な生の相貌のことである。《彼は果てまで歩いて来た。だが彼はたゞたゞ果てまで歩いて来た男なのだ》という、その先に現われた光景である。一回限りの、かけがえのない生の絶対性に憑かれた人物たちの絶対的な生の姿である。

小林はそれをいろんなふうに言い、いくら言っても言いたりないふうである。あるいはドストエフスキーの絶望的な境遇に即して、《それは一般に言へば、どんな強い精神力も境遇を必ずしも改変し得ないが、強い精神力が何かのかたちで利用出来ぬほど絶望的な境遇といふものは存しないといふ簡明な事情》と言ってみたり、《絶望的な境遇を彼がいかに嘆かうが、実際には境遇は彼の仕事にかけがへのない内容を提供してゐるのである。動かし難い必要物と化してゐるのだ》と言ってみたりする。ここにあるのは、所与の境遇を、それがどんなに悲惨な、不平等不公平な、千万言の怨みと憤激を費しても言い足りぬひどいもの、《絶望的な》ものであっても、あえてそれをわが一回限りの変えがたい生、「運命」として受容して、抗言もしないで積極的にわが生涯に転化する《強い精神》の姿である。amor fati に徹した姿である。一度そこに平等とか公平とか、社会的な（というのも変だが）幸不幸とかの視点が介入したら最後、一挙にすべての緊張と充実が崩れてしまう

ほど、きわどく、徹底して《魂のこと》だけに生きている生の姿である。そして小林秀雄はこれだけが人間の生きる姿だと言っているのである。

……彼等は不吉な予感を進んで信ずるのでもなければ疑ふのでもない、単に予感は彼等の意識の場所を占めてゐて動かない。運命に反抗する意力も運命に屈従する智慧も、彼等には不可解である、彼等は運命とは自分等自身だといふ共通の感覚にをのゝいてゐるのだ。たゞ彼等に明瞭なのは、一切の世の約束事を忘却し、己れの生命の果てまで歩かうといふ渇望である。ムイシュキンは美の観念を弄び、ラゴオジンは死と、ナスタアシャは苦痛と戯れる。だが、彼等にしてみれば単に果てまで行きたかつたに過ぎないのである。

（「『白痴』について」傍点中野）

『白痴』の三人の主人公が実際にどうだというより、小林秀雄がかれら三人の生をそのように見たことに重点を置けば、これは最も美しい小林秀雄の歴史観の表現である。この声調はほとんど悲しいと言ってよい。そしてなんども言うとおり、自己と、自己の一回限りの生の規定者としての世界との関わりは、極限状況では必ずこういう抜きさしならぬ不可変の相貌を帯びるはずであって、それ以外にはないのだ。アクセントはつねに自分自身の内的生命の側にだけある。《運命とは自分達自身だ。》小林秀雄の歴史観が、諦念というのとは違う、《強い精神力が何かのかたちで利用出来ぬほど絶望的な境遇》はないという逆説的な表現でしか表現されないのは、必ずそれが「にもかかわらずこれがわが生だ」という事情があるためである。有名な「歴史と文学」の、《死なしたくない子供に死なれたからこそ、母親の心に子供の死の必然な事がこたへるのではないですか。僕等の望む

自由や偶然が、打ち砕かれる処に、そこの処だけに、僕等は歴史の必然を経験するのである。僕等が抵抗するから、歴史の必然は現れる、僕等は抵抗を決して止めない、だから歴史は必然たる事を止めないのであります》についても事情は同じ。この《歴史の必然》はだから史的唯物論の言うそれと違う、内面の逆説的な事情から出た表現であって、死なしたくないからこそ子供の死が《必然な事》になる。自由を渇望するからこそ、それが《打ち砕かれる処に、そこの処だけに》歴史の必然が現われる。つまり、必然はほとんど「運命」という言葉に置き換えうるのである。《僕等は抵抗を決して止めない》、だからこの《抵抗》という言葉を、戦後の使用例で、戦後三十年の語感で、例えばレジスタンスの訳語として読んでは誤る。《抵抗》とは、例えばドストエフスキーがその《絶望的な境遇》にもかかわらず、それを《動かし難い必要物》に化してしまったような、そういう精神の働きのことである。《必然》とは《わがこと》としての《のつぴきならぬ事実》の異名である。《歴史の必然》というときの小林の、辛そうな、悲しい声調がきこえる所以である。

小林秀雄はかつて一度でも冷静な客観的な歴史認識について語ったことはない。彼が語ったのはつねにわが《魂のこと》としての時間である。自由を渇望する意志と、《ただただ果てまで歩》こうとする決意によって、わがうちで生きたり死んだりするふしぎな時間のことである。個体における運命と行動は、そこでは個を越える大きな歴史における必然的な過程とわかちがたく結合して、《運命とは自分等自身の事》となる。歴史は外に眺めるものでなく、自らが生きる具体的な何かのことだからである。

……僕等の発明した時間は生き物だ。僕等はこれを殺す事も出来、生かす事も出来る。過去と

言ひ、未来と言ひ、僕等には思ひ出と希望との異名に過ぎず、この生活感情の言はば対称的な二方向を支へるものは、僕等の時間を発明した僕等自身の生に他ならず、それを瞬間と呼んでいゝかどうかさへ僕等は知らぬ。従つてそれは「永遠の現在」とさへ思はれて、この奇妙な場所に、僕等は未来への希望に準じて過去を蘇らす。（「ドストエフスキーの生活・序」（歴史について）傍点中野）

これは芭蕉の《月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり》に触れて言った時間観だが、小林における主体的時間＝歴史の特徴がよく示されている。歴史とは《僕等には》《生活感情》なのである。存在するのは《僕等自身の生》だけなのだ。小林秀雄のこういう独特な、人間の個体的生の秘密に直接した歴史観が、理論信仰と理論不信と変りはあっても、いわば客観的な物神のように知識人を支配していた歴史観の腰を、一突きでぐらつかせたのは当然のことであろう。まさにそれは小林秀雄という観念とイデオロギーの蔑視者が、あらゆる思想の軽蔑の上に築いた独特な思想、生命の熱い血の通った思想なのだから。

Individuum est innefabile. 個体的なものはいかに語ろうと語り尽くせない。小林秀雄の思想の強靭さとは、《美しい花がある、花の美しさといふ様なものはない》、この一切の抽象性を排し観念の自律性を排したところにはっきりと把握されている Individuum の確かさである。小林の思想の見事さとは、彼のすべての言説（ディスクール）を支える個体把握の見事さであって、言説自体はしばしば矛盾もし撞着もあえてしているのだ。彼の言説はすべて小林秀雄という比類ない存在に帰着させて初めて、その本来の生命を得るのである。彼の言説に対するあらゆる論理的分析や類推が無力なのは、それがあらゆる芸術的個体の秘密と同じく、閉ざされ自己の裡に完結して息づいているものだからだ。

……彼の小説から宗教家や予言者や思想家や心理家を抽き出させるものは、彼の精神の豊饒さに他ならないのだが、彼は本来まことに無意識な芸術家らしい芸術家だつたのだ。彼は解決を求めて摸索する思索人ではなかつた、一点に止つて円熟する芸術家であつた。(『白痴』について)

小林がドストエフスキーを評して言ったこの言葉を、そのままわれわれの小林評に適用してもいいだろう。小林の思想は、あらゆる芸術家の思想と同じく、小林という個の肉体のうちに秘められ、ゆたかな創造原理としてその存在のたしかさを示すのであって、客観的に理論化され、万人の検証に委ねられる開放性はそもそもの初めから持たないのである。どんな理論的思考者だって彼を生かす内奥の思想がその存在と密接していることは同じはずだが、理論家の場合は、理論という客観的な物の構築によって、それを万人の検討に委ねる。それは芸術家における作品の如きものである。その理論がまだ肉体を持たず、実生活の複雑な混沌にたいし仮説の役割しか果さないのは当り前のことである。実感に欠けるのが理論というものだ。しかしそれが理論の無力、無効、侮蔑の理由にならないことは言うまでもない。理論の無力は、それがまだ強力な Individuum の人格的原理となるほどに肉体化されていないことを証明したにすぎない。重要なのは、実生活の抽象としての理論を持つことなしにどんな実生活もありえないということである。小林秀雄の歴史観が、Individuum の生の原理としての歴史観にとどまるかぎり、見事な極限的な《果てまで歩》いて来た人物の徹底性を示し、力強く個に働きかけるにもかかわらず、それが社会や世界や民衆やの歴史認識にまで拡延されるとき無理になるのは、その歴史観、すなわち小林秀雄という独特な精神の構造が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.